

第 61 回慶應 EU 研究会 成果と課題 「ヨーロッパ統合研究におけるコンストラクティヴィズム」

2012 年 9 月 29 日

筑波大学

東野篤子

今回の報告では、新潟国際情報大学の臼井陽一郎先生と同一のパネル枠をいただき、ヨーロッパ統合をめぐる理論についての考察を、臼井先生と分担のうえ、報告させていただくことになった。

私は、ヨーロッパ統合研究におけるコンストラクティヴィズムの研究潮流と課題について報告させていただいた。具体的には、

- ヨーロッパ統合研究におけるコンストラクティヴィズムの席卷状況（および国際政治理論におけるコンストラクティヴィズムの流行と、ヨーロッパ統合研究におけるコンストラクティヴィズムの流行の間の「タイムラグ」）
- コンストラクティヴィズムを用いたヨーロッパ統合研究の主要テーマ
- ヨーロッパ統合研究における「コンストラクティヴィズムへの転回」の背景
- 大論争？（Moravscik vs. Risse&Wiener, Moravscik vs. Checkel）
- ヨーロッパ統合研究におけるコンストラクティヴィズム：展望と課題

等の諸点について報告を行った。

最大の成果としては、ヨーロッパ統合研究におけるコンストラクティヴィズム・アプローチの意義と位置づけについて、私個人としては初めてまとまった報告をさせていただいたことである。日本の EU 研究においてもコンストラクティヴィズムはすっかりおなじみのアプローチとなっているが、その台頭の背景や意義、問題点などを改めて考察し、フロアの方々と意見交換することができたのは、非常に貴重な成果であった。さらに、今回のテーマを臼井先生の「規範的パワー論」をめぐる報告と併せ、ヨーロッパ統合をめぐるより包括的な理論的考察の中で再検討することができたことは、非常に得難い成果であった。

今後の課題としては、コンストラクティヴィズムをより広い国際関係理論の文脈からとらえ直し、ヨーロッパ統合研究とのリンクについてより深く考察したうえで、今回の報告を公刊論文としてまとめ直すことにある。作業を急ぎたい。